

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第183号

イザヤ 65:1

平成22年12月31日

ソロモンは主を愛し、父ダビデのおきてに歩んでいたが、ただし、彼は高き所でいけにえをささげ、香をたいていた。王はいけにえをささげるためにギブオンへ行った。そこは最も重要な高き所であったからである。ソロモンはその祭壇の上に千頭の全焼のいけにえをささげた。その夜、ギブオンで主は夢のうちにソロモンに現れた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。」ソロモンは言った。「あなたは、あなたのしもべ、私の父ダビデに大なる恵みを施されました。それは、彼が誠実と正義と真心とをもって、あなたの御前を歩んだからです……わが神、主よ。今、あなたはわたしの父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし、私は小さい子どもで、出入りするすべを知りません。そのうえ、しもべは、あなたの選んだあなたの民の中におります。しかも、彼らはあまりにも多くて、数えることも調べることもできないほど、おびただしい民です。善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」この願い事は主の御心にかなった。ソロモンがこのことを願ったからである。神は彼に仰せられた。「あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたの後に、あなたのような者も起こらない。そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。また、あなたの父ダビデが歩んだように、あなたもわたしのおきてと命令を守って、わたしの道を歩むなら、あなたの日を長くしよう。 列王記第一3:3-14

士師の時代、イスラエルは、山の頂上など高い場所に設けられた「高き所」でいけにえをささげるカナン人の風習を取り入れていました。天に近づけば近づくほど、祈りやいけにえは神々に届く可能性が高いと考えられ、異邦人の間で非常に広まり、偶像崇拜とほとんど違わなかったこの風習は、族長たちによっても取り入れられたのですが、モーセの掟は、異教徒の高き所をはじめ、神が指定されなかったところでいけにえをささげることをも禁じたのでした。しかし、荒野での礼拝に用いられた幕屋が可動的であり、民の崇拜の手段が単に一時的なものである間は、これら高き所での礼拝は明らかに大目に見られたのです。神はまだ特定の礼拝場所を定めておられなかったので、礼拝を継続させるためにすでに築かれていた場所を用いることはいたしかたなかったのです。ソロモンが膨大な量のいけにえをささげた夜、主はソロモンに夢の中でご自身を顕され、望むものを与えると言われました。そのときおそらく二十歳前後であったソロモンは自らの未成熟さを認め、神の民の王、裁き司、神に委任された統治者としての重責を果たすには、何にもまして神の知恵が必要であることを悟っていました。そこで、ソロモンはイスラエルの民を主の御心に従って導くため、「しもべ」に「聞き分ける心」を与え、神の声に波長を合わせることができるようになってくださいと願ったのです。何よりもまず、神の民の益のために必要なものを願ったソロモンの価値観は神の目にかない、神は、ソロモンが要求したことをかなえると約束されました。一番大切なものを求めたソロモンに神は、賢く物事を見分け、正しいさばきを執行することができるだけでなく、さらに富と名誉をも与えることを約束されました。「ユダとイスラエルは、ソロモンの治世中、ダンからベエル・シェバまで、みな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下で安心して住むことができた」

(列王記第一4:25)と記されているように、平和が国中に満ちたソロモンの時代は、「主に愛された」という意の名「エディヤ」<sup>1</sup>と平和の意の名「ソロモン」にふさわしく、富み栄え、他国からの尊敬を謳歌したのです。

人間史において平和への願望が断たれた時代はなく、平和に貢献する人たちは人々から敬愛され、死後もその功績がたたえられてきました。しかし、ソロモンがイスラエルに平和をもたらした背後には、軍事力、軍事産業の強化、政略結婚をも含めた隣国との平和協定、異邦人宗教への妥協があり、イスラエルの国際的地位、政治、経済、軍事力の低下とともに東の間の平和、繁栄が失われたように、この世がもたらす平和、人間の手になる平和には限界がありました。聖書は、ソロモンが平和のために知恵、権力、富、交際術を駆使して採った政策が、年月とともに神の御旨からかけ離れたものになっていったことを語っています。冒頭に挙げたくだりの最後の神の言葉は、まさにソロモンの墮落を予告するかのような警告でした。最初は、謙遜な神の「しもべ」として、主の御旨を行なうことだけに献身したソロモンでしたが、神の知恵と力、導きによってではなく、自分が正しいと思ったこの世の知恵、処世術で民を正しく裁き、平和をもたらす者になろうとしたとき、墮落の坂を転がり始め

たのです。モーセの掟が王に対して禁じた軍馬、戦車、金銀宝石、物品への欲、数知れない異邦人女性との結婚、偶像崇拜への迎合のすべてをソロモンは犯し、八方美人の王の贅沢な生活を維持するために犠牲になったのは、奴隷制度、徴兵制度を強いられた国民でした。「年をとったとき、その妻たちが彼の心をほかの神々のほうへ向けたので、彼の心は、父ダビデの心とは違って、彼の神、主と全く一つにはなっていなかった」ソロモンは、憐れみの神の二回にわたる警告を受けたのですが、悔い改めることなく、「あなたがこのようにふるまい、わたしが命じたわたしの契約とおきてとを守らなかったで、わたしは王国をあなたから必ず引き裂いて、あなたの家来に与える。しかし、あなたの父ダビデに免じて、あなたの存命中は、そうしないが、あなたの子の手からそれを引き裂こう」(列王記第一 11:11-12)はお言葉通り、しかし、ソロモン自身ではなく、子の時代に実現したのでした。神が一旦授けられた知恵が反逆後もソロモンから奪われることなく存続し、ソロモンが祝福に満ちた生涯を全うしたことに留意することは、神の授ける賜物の性質を知る上で非常に重要です。

神の御目には不忠実なしもべとしか映らなかった平和主義者ソロモンの歩んだ道は多くの世界的指導者たちによって踏襲されてきましたし、今日も依然として同じ歩みが繰り返されています。2002年1月24日にイタリアのアッシジに、教皇ヨハネ・パウロ二世はじめ、イスラム教、ユダヤ教、仏教、ヒンズー教、シーク教、ブードーなど世界各国からの宗教指導者たちが集まり、平和追求、暴力防止のための話し合いが行われ、敵を愛し、信仰や宗教の違いを受け入れ、相互理解を深め、世界に平和をもたらそうとの歩み寄りが急速に推し進められるに至ったことは大きく評価されました。それ以降、世界宗教統一化への歩みは世論に支えられ、着々と推し進められてきていますが、平和達成の名の下で取り除かれようとしているのが真の信仰であることに危惧感を抱く人は少なくなってきました。指導者たちがよく話し合い、宗教的排他性、敵意を取り除き、互いに妥協することが世界平和の達成につながるの信念を前提とした会合は、旧新約聖書が語るヤーウェ信仰、すなわち、真のユダヤ教やキリスト信仰とは真っ向から対立するものなのです。キリスト教教派の一致を促進する狭義の世界教会主義を超えた諸宗教間の一致を目指すこのエキュメニズムはこの世からは歓迎される運動ですが、しかし、ソロモンが一時的な平和をイスラエルにもたらしたにすぎなかったように、力のバランスが崩れるとき、必ず破局を迎えることになる人間が作り上げる虚構の平和に過ぎません。人々が真の神との平和を取り戻さないかぎり、この世に平和はもたらされないのですが、この神との平和を人類にもたらすことはイエス・キリスト以外のだれにもできないことを聖書は明確にしています。言い換えれば、キリスト信仰は、キリストを唯一の救いの道とする排他的信仰なのです。エキュメニズムでは、道はそれぞれ違うが、あるいは、神々の名はさまざま違うが、みな同じ神を拝んでいると主張しますが、キリスト信仰は、キリストを通してのみ真の神を知ることができると主張することにより、崇拜の対象となる神が他の宗教が信じている神々と違うことを明らかにしています。信じている神が互いに違う者たちが「敵を愛しなさい」というキリストの教えに従って互いに助け合い、理解し、表面的には平和裏に共存することはできても、一緒に唯一の神を礼拝するという事は不可能なことで、エキュメニズムによる世界平和は、聖書と御子キリストのみを通して語られる真の神によってではなく、この世の支配者サタンがこの世から真の信仰を取り除くためにもくろんでいる欺瞞なのです。

父ダビデの信仰姿勢から離れ、ヤーウェの神と同時に偶像はじめ諸々の神々を崇拝する多元的信仰に陥ったソロモンの例は、多くの「反キリスト」と終末の末期に現れる最後の「反キリスト」の欺瞞を見抜くための、キリスト信仰に生きる者への警告になっています。キリストの愛弟子ヨハネはすでに一世紀末に「今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や、多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であることがわかります。彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです……偽り者とは、イエスがキリストである(救いへの唯一の道)ことを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです……あなたがたは、初めから聞いたこと(キリストご自身と初代教会の教え)を、自分たちのうちにとどまらせなさい」(ヨハネ第一 2:18-24、下線付加)と、反キリストを見分ける方法を明確にしていますが、正しい信仰でスタートした者が、名声、人望、権威、地位、富、博識、聖霊の賜物におぼれ、正道を踏み外し、不道德、背信で自らを汚すに留まらず、多くの真摯な信者を道連れにしているケースは、今日ますます増えています。ユニークな大教会堂、豪華版のクリスマス劇で一世をふうびし、キリスト教布教五十周年を迎えた米国のある有名なテレビ伝道者は今年秋、破産宣告を受け、また、キリストの名による信仰の癒し手や預言者として世界的、大々的な大集会で活躍している多くの伝道者の不道德、墮落は目に余るものがありますが、その中でも、日本にも訪れたことのある癒しのミニストリーの御所ともいえる霊的指導者の離婚が報道されました。前者の場合は、祈りの込められた十字架など物品と引き換えに献金を要求する偶像崇拜まがいの行為がずっと黙認されて来ましたが、後者の場合は、大集会後に献金袋から現金、小切手だけが抜きとられ、目を通すことなく捨てられた祈りのリクエストがごみ箱から発見されるなど、宗教の覆いの下での考えられないような恐ろしい実態が暴露されてきたのですが、神が一旦授けられた癒しの賜物が取り去られることがないため、これら「神の人」に対する人々の信奉は依然として続いているのです。